道標の拓本

H28.9.5

1 はじめに

漢文学者黒本稼堂は峨山道を自らの足で踏破し，その紀行を「峨山越記」に著し，峨山道を文献として初めて世に明かしました。「峨山越記」の結びに「愚老モ及ハスナガラ、道シルヘノ標石ヲ立テゝ、永久ノ往来ニ便セント思フ。」と記し，熊笹をかきわけて踏査した道の傍らに戸室石に刻まれた道標を立てたのです。

稼堂の残した道標で現存するのは「古和秀水」,「穴水町上中」,「穴水町越渡」の３体だけです。他に鬼屋地内(高尾橋と松岡家の小橋のたもと)に立てた２体は残念ながら昭和３４年の奥能登大水害で流失してしまいました。

〈最も風化が激しい「越渡の道標」〉

「峨山越記」の発刊が昭和７年ですから，おそらくほぼ同年代に立てられたものと思われます。稼堂は漢文学者であると同時に書家でもあり，昭和５年に金沢神社の境内に立てられた四高五代校長北條時敬の頌徳碑の揮毫(きごう)は彼によるものです。

路傍の草むらにひっそりと立つ道標はその後多くの宗教人や歴史学者による峨山道探査の文字通り「みちしるべ」となりました。しかし，稼堂の残した道標は戸室石に刻まれており，年月とともにその風合いが深まる一方，御影石と比べて風雪雨による傷みも早いのです。稼堂の筆致によるとされる文化財的価値のある道標文字を今のうちに拓本で残そうというのが今回のＤＩＹ挑戦です。

2 拓本の道具

拓本には湿拓と乾拓がありますが，今回はより鮮明な湿拓に挑戦しました。

〈霧吹き〉

〈油墨〉

〈自作たんぽ〉

・霧吹き…水用と少しだけのりを含んだものの２種類
・油墨(あぶらずみ)…市販のもの(普通の墨は水でにじむので使えません)
・たんぽ…２個(自作)　　・乾いたタオル　　・ガムテープ

3　拓本の材料

拓本で何が最も大事かって，そりゃ紙に決まってるでしょう。その通りなんですが，ではどんな紙がいいかというと今回は湿拓ですのでまず水に強くなければなりません。水をよく吸い，しかも簡単に破れない紙といえば和紙です。しかし，単に和紙といってもその種類は多種多様です。

今回，３種類の和紙を試してみました。

① 市販の拓本セットの和紙

② 100円ショップの無地和紙

③ 石川書研の書き初め用紙

市販の拓本セットの紙が最もいいと思いがちですが，必ずしもそうではありませんでした。もちろん①は充分使えるし，②は思った以上に良い結果でしたが，私が試した限りでは③が最も仕上がりがきれいでした。

それではどんな場合も③がいいかというと石の形状と風化の状態によります。

今回のように拓本の素材の石の表面が平らで比較的傷みの少ない場合は確かに③がいいのですが，右写真のように丸みを帯びた石や風化によって文字の輪郭が不鮮明な場合は③より厚手で丈夫な①や②のほうがいいようです。

4　拓本の手順

拓本を採るにあたって最初にしなければならないことがあります。それは，対象物の所有者または管理者の許可を得ることです。今回は当該地区の区長に了解を得ました。

次に注意することはできるだけ風のない日を選んで作業をすることです。

では作業にとりかかります。まず，石(道標)に少しだけのりを溶かした霧吹きで石全体を濡らします。(水だけの霧吹きだと石への張り付きが弱く，少しの風ではがれてしまいます。)

水が石にしみこむまで１～２分待ちます。天候にもよりますが，石の水分は上部から乾いてきますので適当に何回か霧を吹きます。

文字の位置と紙の大きさを合わせて石に紙を載せます。載せた紙に石の水分がしみ出てきます。

この段階で左写真のように紙がめくれないようにガムテープで軽く止めます。(あまりしっかり貼るとはがすときに紙が破れてしまいます)

次に水だけの霧吹きで紙の上から石の地が透ける程度にまんべんなく霧を吹きます。紙全体がしっとり濡れた状態で，乾いたタオルで紙を石の表面にやわらかく押し当てていきます。文字の彫られた輪郭の部分は特に少し強めにあてる必要があります。強くあてすぎて紙が破れることがありますが，少しくらいの破れやしわは表装でカバーできますので気にしません。

紙の表面がうっすら乾くのを待ち，石表面の文字の凹凸が紙に現れ

たことを確認します。

いよいよ墨付けです。墨は拓本用の油墨というものを使います。習字や水墨画用の墨は水に溶けてにじんでしまいますので湿拓には使えません。少し値がはりますがこれが無くては拓本は始まりません。

墨付けには「たんぽ」というお化粧道具のようなものを使います。「拓本はたんぽで決まる」というほど大切なアイテムですが，買えばそれなりの値がしますのでこれは自作します。

100円ショップの手芸コーナーにあるぬいぐるみの中詰め用の綿を買ってきます。それを木綿の布で赤ちゃんのほっぺぐらいのやわらかさにして包み込みます。大きさは片手で握り込める程度でいいでしょう。

市販のたんぽは絹布で綿を包んでいます。しかし，ＤＩＹはそんなところにこだわってはいけません。仕上がりがそれらしくできればそれでいいのです。木綿で充分です。

さて，たんぽは必ず２個セットで使います。油墨をしみこませたたんぽを両手でよくこすりあわせてたんぽに墨をなじませます。充分なじんだたんぽの墨を紙にあてるのですが，この時たんぽを紙に絶対こすってはいけません。軽くたたくのです。まんべんなく全体を軽くたたきます。２つのたんぽの墨をなじませながらひたすらたたきます。たたいているうちに徐々に紙が乾いてきて，墨の濃淡の具合が見えてきます。文字の輪郭がはっきり現れたら完成です。周りのガムテープを下の方からゆっくりはがして，あとは新聞紙にはさんで乾かします。

５　作品３点

鬼屋　古和秀水

穴水町　上中

穴水町　越渡

古和秀水の作品は墨が薄すぎ，上中は濃すぎた感があります。ここら辺が素人らしくていいところでしょう。越渡は石自体の傷みが激しく文字の輪郭を採るのに苦労しました。前にも書きましたが，丸みを帯びたものや傷みの激しい場合は書き初め用紙ではなくもう少し厚手の和紙のほうが鮮明に採れたのかも知れません。